

## 天文用語共通化の歴史

### 天文学で使う用語

私たちが天文や宇宙について語る時、さまざまな用語を使っています。しかし、使われる用語がバラバラですと何かと不便なため、なるべく共通化しようというのは自然の流れでしょう。そこで日本では、100年以上前から用語を統一しようという動きがありました。始まりは1908(明治41)年。東京天文台を中心に日本天文学会が結成されました。その際、特に海外からの論文や情報を利用する場面などで用語の共通化の必要が痛感され、有志の間で約300の用語を制定し、会誌で使用しました。

1920年代に入ると、プロの天文学者だけでなくアマチュアの層も厚くなってきます。すると、学者やグループなどによって使う用語が異なる場合が顕著になってきました。有名な「惑星」が「遊星」か、という話はその一例です。この問題に対し、京都帝国大学教授の山本一清は、1934(昭和9)年から主宰する東亜天文協会(現東亜天文学会)の会誌『天界』上で「天文用語に関する私見」と題した原稿を不定期に連載し、天文用語について意見を述べていました。これを機に、山本に刺激を受けたアマチュアたちも使用する用語に対して大きな興味を示すようになるのです。

### アマチュア天文家による天文用語制定の動き

中でもユニークなのは、大阪に拠点を置くアマチュア天文団体「天文研究会」で、天文用語に興味を持つだけでなく、何と自ら検討・制定しようと試みたのです。1936(昭和11)年9月発行された天文研究会の会誌『The Milky Way』第16号の巻頭言は、「大阪天文研究会選定 天文学術語彙」と題された記事(写真1)で、以下のように会で独自の天文学術用語を選定し、誌上で連載する宣言をしています。

「我が天文学に限らずあらゆる学問に於いて、その学術語の統一ゆるは邦家学術振興上の見地より見て一日も忽がせにできない問題であります。(中略)我が天文学界に於いても権威者を網羅したる調査会に於いて統一を見る日の一日も早からん事を吾人は望んで居るのであります。斯かる日まで本会に於いては暫定的に天文学術語を本紙に連載する如く制定する次第であります。」

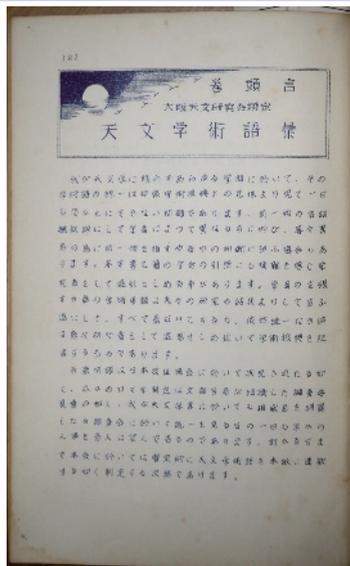


写真1:天文研究会の会誌『The Milky Way』

続けて、88星座とアルゴ座を加えた合計89の星座名について、それぞれ学名、学名物主格、日本語の星座名を列挙し、さらに、ギリシア文字のアルファベットの文字と発音(カタカナと英文字)も挙げています。

この「天文研究会」は、発行直後に東亜天文協会の大阪支部になったため、続編が掲載されることはありませんでした。しかし、その活動は引き継がれ、1938(昭和13)年6月、東亜天文協会大阪支部編集として、『星座名対照表』(銀河叢書第一輯)が発行されています。

## 学術研究会議による用語統一の動き

そのような中、1941(昭和16)年2月には、国の学術研究会議に天文学術語委員会が設けられます。それに先立つ1940(昭和15)年には、帝国学士院において「天文学術語統一に関する委員会設置準備委員会」が組織され、1941年1月25日付で、アマチュアを含めた関係団体に対して、用語統一の参照のために星座名89、天文用語329を英語で記した表を送付し、それぞれの団体が使用している用語を記入し報告するよう要請しています。つまり、用語の共通化にあたっては、プロの天文

天文術語集	
学術研究会議 (1) 一般用語 (星座名外)	
A	B
Aberration 光行差	Argument 引数
Absolute magnitude 絶対等級	Artificial horizon 人工水平
Accidental error 偶然誤差	Ascending node 昇交點
Adjustment 調整	Asteroid 小惑星
Age (of moon) 月齢	Astrographic chart 寫真位置圖
Air chamber (of level) 氣室	Astrographic catalogue 寫真恒星表
Albedo 反射率	Astronomical 天文
Algol-type variable アルゴル種変光星	Astronomy 天文學
Almanac 天文暦, 曆	Astrophotography 天體攝影術
Altazimuth instrument 経緯儀	Astrophysics 天體物理學
Altitude 高度	Attached level 取付水準器
Angle of eccentricity 離心率角	Azimuth 方位角
Annual 年間	
Annual equation (of moon) 年差 (月の)	Baily's beads ベーリーの珠数
Apartheid 隔離	Barycentric coordinate 重心座標

写真2:『天文術語集』の一部

学者だけでなく、アマチュアが使っていた用語についても一定の配慮をしていたのです。これは、当時のアマチュア天文家の層が厚かったことを物語っていると言えます。

そして、委員会では10回の審議を重ね、その成果として89の星座名(アルゴ座を含む)と、505の用語が掲載された『天文術語集』が1944(昭和19)年1月に発行されたのです(写真2)。

その後、戦後には文部省(当時)が学術用語の制定を開始し、1974(昭和49)年に『学術用語集 天文学編』を刊行していますが、残念ながら1994(平成6)年発行の改訂版が最新という状態で、現時点では新しい動きもありません。そこで、日本天文学会がインターネット上で「天文学辞典」を公開し、用語については標準的に使われるものを選んでいますが、統一を目的としたものではありません。今後、また標準的な用語に関する議論が出てくるかもしれません。

嘉数 次人(科学館学芸員)